

## 横須賀市学力向上推進プランの目標指標に関連する調査結果(値)が大きく上昇した学校(抽出校9校)の自校の取組についての分析



本年度の横須賀市立小・中学校学習状況調査（以下：市学習調査）において、学力向上推進プランで掲げる目標指標の目標値に関連する調査結果（値）が大きく上昇している項目がある学校を、市内で9校（小学校5校、中学校4校）抽出した。

そして、各学校には、上昇した項目について、昨年度の小4時や中1時の学級経営や学習指導等を振り返ってもらい、その要因について分析してもらうよう依頼した。

以下は、その分析結果を学校担当の指導主事が聞き取り、まとめたものである。

## 目標 1 学び合う集団の育成を図る

### ◆主体的・対話的に授業に臨もうとする意識の向上

(ア)「授業等の話し合い活動で、自分の意見を広げたり、深めたりできているか」

(イ)「みんなで課題を解決する場面で協力しようとしているか」の肯定回答率が向上した要因

(A 中学校 (ア) R4 年度:64.9% ⇒ R5年度:78.7% 13.8%↑

(イ) R4 年度:83.0% ⇒ R5 年度:88.3% 5.3%↑ ※以下は年度省略)

- ・昨年度、校内研究により積極的に課題解決学習を取り入れ、生徒たちの活動が保障されるよう取り組んだ。
- ・各教科等で考えたいくなるような課題や問い、興味を引くような導入（動機付け）を行っている。
- ・話し合いの場面が各教科等共に多い。（内容・難易度で協力する必要がある課題設定）
- ・安心して学習・生活できる環境を教師と生徒でつくってきた。（生徒指導・行事・道徳）

(B 中学校 (ア) 68.3% ⇒ 85.4% 17.1%↑ (イ) 90.2% ⇒ 92.6% 2.4%↑ )

- ・各教科等の授業で、話し合う機会を意識的に取り入れている。また、「ここからグループで話し合う」というような区切った授業展開よりも、状況によって「隣（まわり）の人と相談する」というように気軽に話し合う場面が多くしている。
- ・年 10 回実施している全校集会での全体講和（学校長、学力グループ等が担当）においても、一方的な講和ではなく、周囲と話すような場面を設定するようにしている。「話し合う」ということが特別なことではなく、日常的に行われていることの成果と考える。

(C 中学校 (ア) 69.5% ⇒ 82.1% 12.6%↑ (イ) 95.2% ⇒ 92.1% 3.1%↓ )

- ・校内研究において、生徒同士のつながりを授業の中でも大事にしてきている。これは校内研究だけでなく、日常の授業においてもすべての教科等でペアやグループでの話し合い活動が展開され、しっかりと定着してきていると考えている。
- ・生徒会活動、学級活動も重視して取り組んでいる。生徒総会においては、事前の学級の取組から丁寧に話し合いが行われ、学級の意見をしっかりと総会に持っていっている。校則に関すること等、様々な場面で、自分たちの学校生活を考える話し合いが行われていることが、違っていても自分の意見を表明するということや、同じ意見でも自分なりに考えて発言するといったことにつながっていると考えられる。

## 目標 1 学び合う集団の育成を図る

(D 中学校 (ア)71.6% ⇒ 77.6% 6.0%↑ (イ)90.1% ⇒ 92.1% 2.0%↑ )

- ・教員全員が1人1台端末（Chromebookに関することは、以下、1人1台端末という）をツールとした授業改善に取り組んでいる。1人1台端末の使用を何のためにやっているのかを常に確認しながら研究を進めている。
- ・1人1台端末を使うことで、他人の意見にも容易に触れられ、対話的な学びも日常的。生徒たちは多くの授業を「楽しい」と感じていることが要因と考えられる。

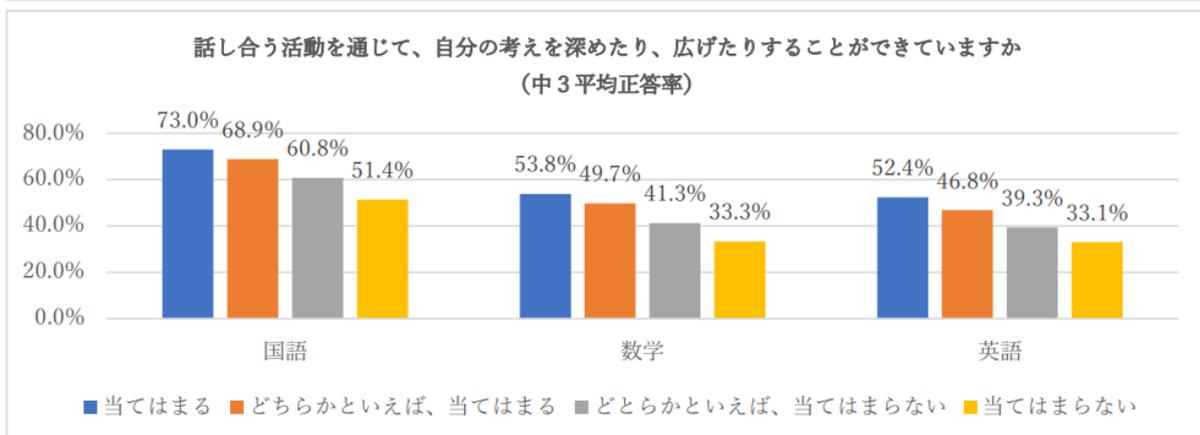
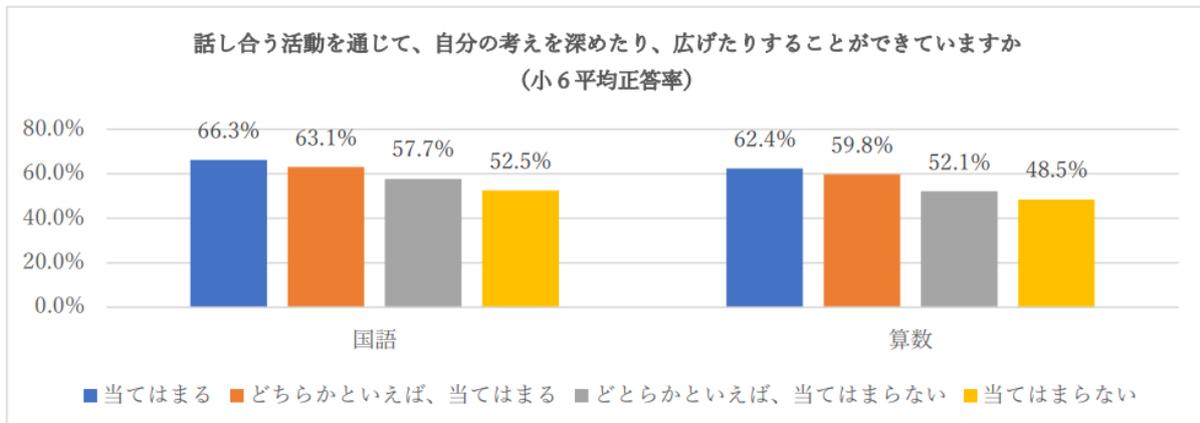
(E 小学校 (ア)60.5% ⇒ 74.4% 13.9%↑ (イ)67.4% ⇒ 94.9% 27.5%↑ )

- ・学校教育目標やグランドデザイン、重点プラン、学校研究など、各項目の内容をしっかりとリンクさせるとともに、職員への周知を数年かけて行っている。
- ・より子どもの具体のイメージが共有しやすいように、「表現」にテーマを焦点化し、共通言語を使うこと、自分の意見が言えたり、聞けたりする風土をつくっていくことが校内研究などの場面で確認され、全体的な取り組みとなっていることが成果につながったと考える。

(F 小学校 (ア)48.8% ⇒ 76.8% 28.0%↑ (イ)88.4% ⇒ 93.1% 4.7%↑ )

- ・低学年のころから教師が「あなたたちのことを大切に思っているよ」ということや、教師から積極的に「ありがとう」「ごめんね」といった感謝や謝罪の気持ちを伝えるようにしている。日常的にほめること（認めること）を意識して関わっている。

図1 全国学力・学習状況調査（小6・中3）の分析結果～教科に関する調査結果と質問紙調査結果のクロス集計～①



「自分のことを大切に思うことができるか」の肯定回答率が向上した要因について

(A 中学校 76.6% ⇒ 82.0% 5.4%↑ )

- ・小学校時代は指導困難な状態が続き、授業が成り立たなかったり、児童理解が追いつかない状態になったり、自分自身と向き合ってもらえなかったという生徒が多くいた。リーダーの育成、決まりを守ることの大切さ、生徒ができたことをきちんと評価する姿勢など基本的な生徒指導を大切にし、授業が成り立つ状態をつくった。そのことで生徒一人一人の課題に向き合う事ができるようになり、自己肯定感の向上につながったという評価ができる。
- ・道徳や特活などを通して多様な価値観に触れ、学習することで自他を理解できる生徒が増えた。

(C 中学校 78.1% ⇒ 84.1% 6.0%↑ )

- ・学級活動をしっかり行っている。行事などに積極的に取り組む生徒が多く、またきちんと振り返りを行っている。頑張りが自覚できるような振り返りを行っている。教師は価値付け、学級通信に載せるなどしている。

(E 小学校 67.4% ⇒ 87.2% 19.8%↑ )

- ・子どもの接し方が重要と考える。職員によって違いはあるが、子どもの考えや発想を大切にすること、肯定的に考えることを促すような声掛けをすることなどが効果的であったと考える。

(F 小学校 90.7% ⇒ 90.7% 0.0%→ )

- ・教師が児童の自己肯定感を大切にしようと接してきたこともあって、児童同士の人間関係もよく、授業中の発言に対して肯定的に受け止める風土がある。
- ・学年の人数も40名強なので、毎年適度に学級編成を行うことができることも要因ではないかと考える。

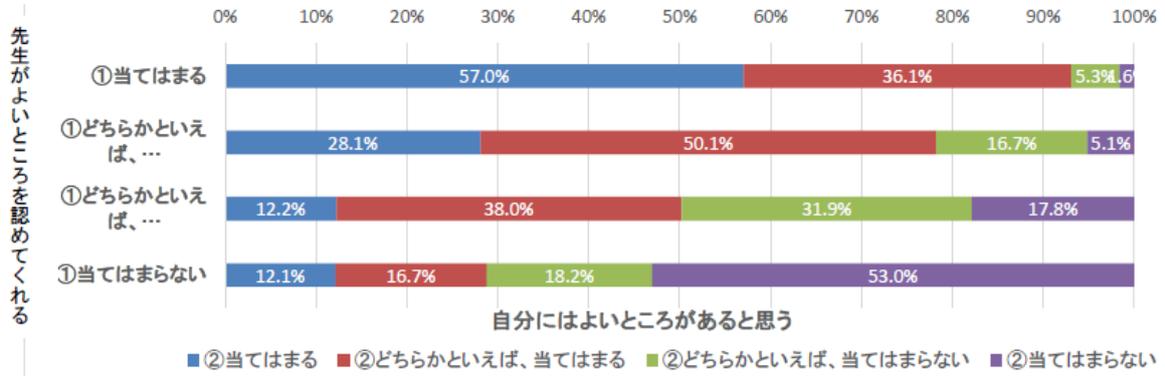
(G 小学校 71.4% ⇒ 92.1% 20.7%↑ )

- ・昨年度の40人1学級を20人の2学級にしたため、教員がきめ細やかな指導ができていることが大きいと考えている。子どもたちも教員や友達に自分を認めてもらえると感じているようで、保護者からも肯定的な声が上がっている。
- ・数年前から課題であると捉えていた自己肯定感の向上は、継続して校内研究で意識してきた成果の現れでもあると考えている。学年を超え、全教員が全児童に対して、同じ意識で関わるようにしてきたことの成果と捉えている。
- ・授業でも自分の意見や他者の意見を尊重しながら考える授業を行っている。

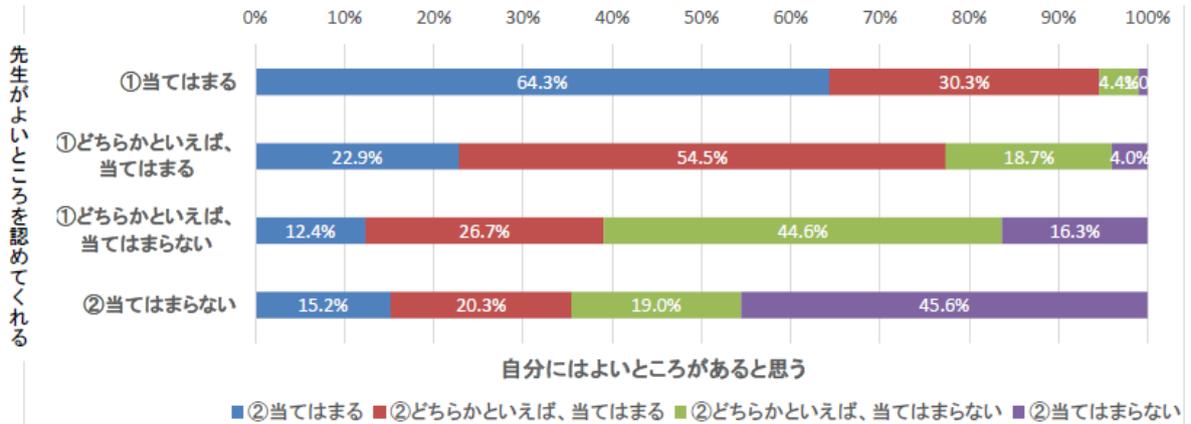
## 目標 1 学び合う集団の育成を図る

図2 全国学力・学習状況調査（小6・中3）の分析結果 ～ 教科に関する調査結果と質問紙調査結果のクロス集計 ～②

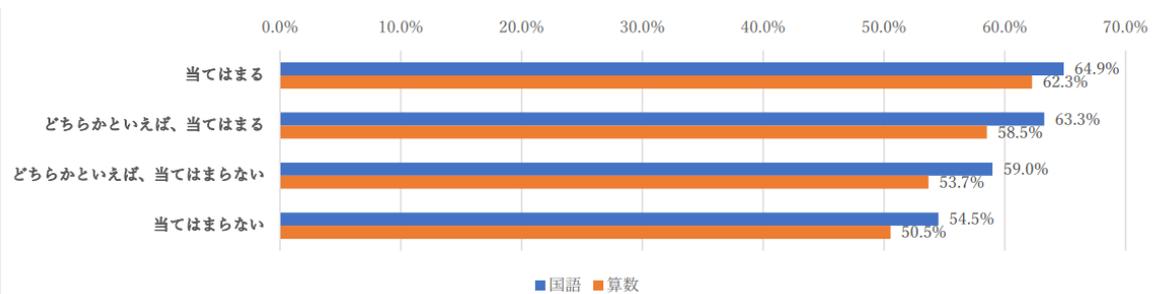
〔先生がよいところを認めてくれる〕 × 〔自分にはよいところがあると思う〕（本市 小6）



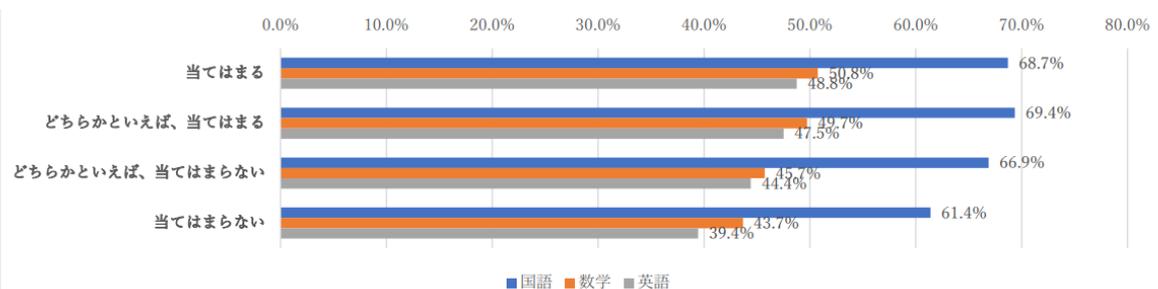
〔先生がよいところを認めてくれる〕 × 〔自分にはよいところがあると思う〕（本市 中3）



〔自分にはよいところがあると思う〕 × 平均正答率（本市 小6）



〔自分にはよいところがあると思う〕 × 平均正答率（本市 中3）



## 目標 2 粘り強く学ぶ力の育成を図る

### ◆粘り強く課題に取り組む姿勢の向上

「難しい課題にも挑戦して取り組もうとするか」の肯定回答率が向上した要因について

(A 中学校 80.9% ⇒ 82.0% 1.1%↑)

- ・生徒の実態は前述したとおりであるが、それでも授業中や試験において各教科等とも「ここまではできるようになってほしい」という願いをもって指導をし続けた。生徒の実態ではやや難しい課題があったと思うが、生徒たちは乗り越える楽しさ、理解できるようになるうれしさを少しずつ実感できるようになっている。そのことが「難しい課題に挑戦する姿勢」の向上につながったと判断する。
- ・小さな成功体験を積み重ね、「挑戦する」というレディネスが少しずつ高まってきている。

(B 中学校 75.6% ⇒ 87.8% 12.2%↑)

- ・自分で考える力を高めることを目的に、朝の10分間に思考力を働かせる問題に個人で取り組む「シンキングパワー」（朝学習の時間を使い、思考力を高める問題等に取り組む時間）を行っている。

(D 中学校 74.1% ⇒ 85.1% 11.0%↑)

- ・教師がやらせるのではなく、「子どもに考えさせよう」「考えるプロセスを大切に」を合言葉としてきた。教科等の授業だけでなく、生徒会も、校則も同様に取り組むようにしている。

(E 小学校 65.1% ⇒ 76.9% 11.8%↑)

- ・教科等や単元や題材などの特性にもよるが、子どもたちが「やってみたい」「考えてみたい」と捉えたものは、じっくり時間を確保し、とことん追究させることが多い。職員によってその軽重はあるが、成果を上げている学年ではそういった取り組みが行われている。

(G 小学校 74.3% ⇒ 86.7% 12.4%↑)

- ・まだまだ粘り強く学ぶ力は不足していると感じているが、あきらめたり、投げ出したりしそうな子どもたちには、教員が日常的に粘り強く励ましの言葉をかけている。

「記述により回答する問題の無回答率」が減少した要因について

(A 中学校 国 46.7% ⇒ 21.4% 25.3%↓ 数 32.1% ⇒ 21.8% 10.3%↓)

- ・上述の通り課題を出す際に「ここまではできるようになってほしい」という願いを持って教師がまず粘り強く求め続けた結果だと考える。
- ・問題の答え方や公式を覚えるだけでなく、授業の中で考え他者と意見交換をするなかで、どのように解答すればいいかを考える力を身に付けてきたことも要因と考える。

(G 小学校 国 23.5% ⇒ 16.2% 7.3%↓ 算 16.2% ⇒ 24.3% 8.1%↑)

- ・何もしないことは自分の力を発揮するチャンスを失うことになることと繰り返し伝えている。
- ・もともと書くことが、得意ではない子どもが多かったので、国語をはじめ様々な教科等で、ノートと併せて 1 人 1 台端末で書かせる時間をとるようにしていた。1 人 1 台端末は、書いたものの順番を変えたりすることが簡単のため、書くことの取組のハードルが下がったと感じている。書いたことの推敲の時間が十分にとれたことも結果につながったのではないかと。
- ・紙に書くことと 1 人 1 台端末に書くことは、子どもたちが自分で選ぶことができ、書きはじめに關しての子どもたちのハードルを下げようとしたことも要因となっていることも考えられる。

(H 小学校 国 44.4% ⇒ 15.6% 28.8%↓ 算 16.7% ⇒ 17.8% 1.1%↑)

- ・席替えでは、教師が学習集団で核になる児童をちりばめて座席を配置し「自由に席を立っても構わない」と教師から子どもたちの意識を変える投げかけを続け、子ども同士の学び合いが促進した。
- ・鉛筆で書くだけでなく、1 人 1 台端末に入力し、共有、発表する機会を意図的に増やした。
- ・「(自分の考えを)書くことを大切に」「自分の考えを少しでも伝えよう」「正解にこだわらない」と日頃から、声を掛け意識付けるようにした。
- ・1 人 1 台端末を通して共有する、互いの考えを参考にする、自分の意見のもとにする等の機会を意図的に増やした。発表の際には、発表が苦手な子の意見を教師が価値付けることを心がけた。
- ・家庭で自主学習に取り組むことを宿題にして、自分の興味をまとめる・表現する取り組みを日頃に行えるようにした。

(I 小学校 国 60.0% ⇒ 25.0% 35.0%↓ 算 30.0% ⇒ 25.0% 5.0%↓)

- ・書く力を付けるために、振り返りを多くの教科等で行い、時間を決めて、ある程度の分量を書く機会をつくった。
- ・学習支援員の個別支援、TT 授業を継続し、より効果的な指導支援の方法を探った。
- ・学校図書館の使い方指導、児童会図書委員による学校図書館イベントや読み聞かせ会などを行い、年間を通して、児童が本に接する機会を今後も多く取るようにしていた。

## 目標 3 学力層全体の引き上げを図る

### ◆同一集団の経年変化の上昇

平均正答率の割合が、同一集団の前年度の数値を上回った要因について

(A 中学校 国 74.4% ⇒ 93.3% 18.9%↑ 数 78.1% ⇒ 90.9% 12.8%↑)

- ・「授業の成立」や「個々の課題に向き合う姿勢」「行動や結果に対する正当な評価」など学校において大切とされてきたことを大多数の生徒が必要だと考えてくれた結果、底上げにつながったのではないかと分析する。
- ・授業においてインプットだけではなく、学び合い活動を通してアウトプットをすることを繰り返し取り組んだことが学力上位層の成長につながったのではないかと分析する。
- ・課題を終えた生徒にはさらに次の課題を用意し、より自身を高めるように授業をデザインしている。

(D 中学校 国 101.7% ⇒ 107.3% 5.6%↑ 数 103.7% ⇒ 108.4% 4.7%↑)

- ・1人1台端末の活用によって、学習内容の定着と思考力の育成の相乗効果を感じている。アンケートから生徒もそれを実感していることがわかる。

(H 小学校 国 87.5% ⇒ 97.2% 9.7%↑ 算 91.7% ⇒ 91.8% 0.1%↑)

- ・基礎学力を高めるための特別なことはしていない。因果関係が定かではないが、1人1台端末を利用したドリルパーク（国・算）を朝学習や授業中課題終了後の時間などで、自分のペースで各自が取り組むことを認めていたことが要因としてあるのかもしれない。

(I 小学校 国 61.7% ⇒ 95.7% 34.1%↑ 算 88.1% ⇒ 94.7% 6.6%↑)

- ・学ぶ楽しさ、学ぶ意味に気付かせる授業を心がけるとい目標をもち、それぞれの教員が授業を行っている。人と関わる楽しさを通して、お互いを認め合い関係を深める学級づくりを心がけている。

#### 抽出校に共通した指導に生かせる視点

**A** 日常的に自由に話し合える風土

**B** 安心して学ぶことができる教師のかかわり

**C** 子どもが学びの必然性を感じる動機付け

**D** 学びの自覚や実感を伴った振り返り

調査結果が大きく上昇した学校の取組には左のような共通点がありました。各校では、児童生徒が安心できる教室の中で自由に話し合う姿や、その姿をあたたく見守り、時には子どもと一緒に話し合うことを楽しむ教師の姿が見られました。また、全教員が目指す目標を明確にし、全ての教育活動を通して粘り強く児童生徒と関わっていくことが改めて重要であるということを確認することができました。